遠谷全集　第二卷

遺谷全集

第三卷

昭和三十年九月十日　第一刷發行
昭和四十七年十二月二十日　第十二刷發行

透谷全集　第三卷（全三卷）

定價千圓

編者　勝本清一郎

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發行者　岩波雄二郎

東京都板橋區板橋四丁目四七番七號
印刷者　山田博

發行所　東京都千代田區一ツ橋二ノ五ノ五　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

三陽社印刷・松岳社製本

目次

研究

エマルソン……三

漢詩・俳句・和歌

漢詩……二五

俳句……二八

和歌……一三

手記及び書簡

哀願書……一三五

富士山遊びの記憶……一三六

手帳のはしに……一五六

夢中の詩人……一五七
石坂ミナ宛書簡一八八七年八月十八日……一六〇
《北村門太郎の》一生中最も惨憺たる一週間……一七〇
父快藏宛書簡一八八七年八月下旬……一七四
石坂ミナ宛書簡一八八七年九月三日……一八二
石坂ミナ宛書簡一八八七年九月四日……一八五
悲苦の世紀……一八七
石坂ミナ宛書簡草稿一八八七年十二月十四日……一八九
絶　情……一九三
在米石坂公歴宛書簡草稿一八八七年十二月十六日……一九五
石坂ミナ宛書簡一八八八年一月廿一日……一九八
嗟世に愛情より……二〇三
石坂昌孝宛書簡一八八八年三月廿三日……二〇五
明治二十一年四月の旅行記概畧……二一〇
石坂登志子宛書簡草稿一八八八年春頃……二一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

島崎藤村宛葉書一八九二年四月卅日……二二五
島崎藤村宛葉書一八九二年五月八日……二二六
川合信水宛葉書一八九二年六月十日……二二七
島崎藤村宛葉書一八九二年九月二日……二二八
川合信水宛葉書一八九二年九月十三日……二二九
女學雜誌社編輯局宛封筒〔一八九二年〕十一月卅日……二三〇
秋山國三郎宛葉書一八九三年一月二日……二三一
島崎藤村宛書簡一八九三年一月五日……二三二
北村ミナ宛書簡草稿一八九三年八月下旬、花卷にて……二三三
北村ミナ宛書簡一八九三年八月下旬、花卷より……二三七

日記

透谷子漫錄摘集……二三三

評論及び感想（三）

「楚囚之詩」廣告文……二七五

當世文學の潮摸様……二七六
漫言一則……二八一
恆になんぢの神を仰ぐべし……二八三
實行的道德……二八七
日本組合教會の總會……二九〇
新　誠……二九二
諸音に於ける聖書……二九六
基督は吾等が生命なり……三〇〇
主のつとめ……三〇三
「腓立比物語」……三〇七
「舊約聖書便覽」……三〇八
人に對する神の旨……三〇九
忍ぶ者……三一二
聖書を濫用する勿れ……三一六
主の招き……三一九

如何に與ふ可きや……三三一
神を畏るゝ事……三三五

飜譯

ウイリヤム・ジョンス氏演說筆記……三三一
舊約と戰爭……三四五
平和會の起原及發達……三四九
ペード氏の聖書翻譯……三五五
安息日を守ることに就きて（ホイトニー）……三六〇
聖書の理想……三六七
說教者の天職……三七〇
クロムウエル時代の英國の聖書……三七二
Life of Sogoro（「佐倉義民傳」英譯）……三七三

資料

日本平和會入會簿……三九五

懸賞問題答案平和雑誌……三九九
平和の白き羽（第一號）……三九九
人は凡て兄弟なり、兄弟は戰を爲すべからず（第二號）……四〇六
戰爭と基督教（第三號）……四一二
數年間の奴隷（第四號）……四一八
兵卒は自由なる人にあらず（第五號）……四二四
兵卒の自白（第六號）……四二九
調停は爭論を決する最良の方法なり（第七號）……四三五
戰爭の本色（第八號）……四四〇
勞役社會に於ける戰爭の價値（第九號）……四四六
勞役社會と戰爭（第十號）……四五二
戰爭の不道理なること及び其過誤なること（第十一號）……四五八
戰爭の慘狀（第十二號）……四六三
聖書平和之教……四七〇
「平和」抄……四八一

「聖書之友雜誌」抄……四九〇
透谷語錄……五一一
未完並びに散逸作品記錄……五三〇
戸籍・學籍・洗禮簿・過去帳……五三八

目錄・年譜・系譜（勝本清一郎）

肖像寫眞目錄……五四九
筆跡目錄……五五〇
關係新聞雜誌目錄……五五四
著書目錄……五五七
發表年月日順著作目錄……五六〇
年譜……五七九
系譜……六二八
解題（勝本清一郎）……六三五

研究

エマルソン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目錄

年表……七
小序……九
第一章　エマルソン小傳……三
其一　少壯の時代……三
父の家。母の家。家風。兄弟。父を喪ふ。「ハーバード大學」に入る。當時の素養。ボストン第二教會の新牧師。エレン・ルイサ・タツカーを娶る。
其二　彼の教職……二六
彼の位置。彼の疑は主として聖晩餐の上に萌せり。告別の辭として爲したる最後の説教。聖餐に關する意見。辭職。
其三　歐洲行……三一
以太利行。英國行。コレリツヂを見る。湖畔詩人ウオーヅウオルスを訪ふ。エマルソンとカアライルとの會合。
其四　講話者としてのエマルソン……三八

新講壇。

其五　コンコルドに於る彼……二九

第二の妻リデアン・ジャクソンを娶る。コンコルドの新家。隠逸。處女篇。「ダイアル」の發行。エマルソンの易簀。

第二章　エマルソンの處女篇　自然論……三六

新人の新聲。自然の意義。天生と術生。自然の悦樂。自然と人間との調和。自然の便用。自然の美。自然に對する愛慕。美術。言語。自然の教義。自然の純一。唯心說。詩人と哲學者。宗教及び倫理の唯心說。精神。期望。

第三章　報酬論……六三

「報酬論」の成りし所以。報酬の說。「心靈は一切の物を我が有とするを得るなり」。

第四章　自信論……六九

「自然論」及「報酬論」の著者と「自信論」の著者。「汝自身を信ぜよ」。習慣の死骨に默從するの弊。整合を求むるの弊。人は須らく徑立して行くべし。心靈と聖大なる精神との關係。平和の秘訣。

第五章　英雄論……七六

其一　序論……七六

其二　プレトー、哲學者……七九
プレトーのプレトーたる所以。プレトーの原造。英雄とは何ぞや。「大才は短かき傳記を有す」。哲學管見。東洋と西洋の思想の相異。

第六章　エマルソン小論……八四
其一　彼の祖先、周圍、及び生活……八四
彼の生涯の異色。彼は幸福なる者の中の幸福なるものなり。波瀾なき波瀾。
其二　彼は詩人なりや……八六
彼は詩人なりや、然り彼は詩人の一人なり。彼は詩人なりや、曰く然らず。彼の詩題。
其三　彼は哲學者なりや……九二
彼は哲學者なりや、曰く然らず。彼は本來のエマルソンなり。哲學に對する彼の意見。
其四　エマルソンの地位……九四
偉人は自らの身邊に其時代を吸收す。彼は偉人の世に處する道を知れり。米國に於ける新人。
其五　エマルソンの自然教……一〇〇
彼は雜尨の犧牲なり。エマルソンの自然。彼は新しき民として生れたり。エマルソンが米

國の民に施したる新福音。遙東の寂靜なる自然思想を消息したる一紳士。彼の神。

其六　彼の樂天主義……一八

智識は悲の本源なり。偉大なる厭世家と偉大なる樂天家。彼が樂天の行路。彼は微細に自然を察したり。彼は世の規律的の善惡を卑めり。唯心的樂天說。

其七　彼の實際敎……二七

エマルソンの眞本領。エマルソンとカアライル。實際敎の實際敎たる所以。

年表

西暦千八百〇三年　エマルソン、マサチユーセツト州のボストン市に生る。
同　千八百十一年　エマルソンの父死去。
同　千八百十七年　「ハーバード」大學に入る。
同　千八百二十一年　大學を出づ。
同　千八百二十九年　ボストン第二教會の牧師となる。
同　千八百三十年　ボストン市の良家の女エレン・ルイサ・タツカーを娶りしが、一年を出でずしてタツカー死去。
同　千八百三十二年　教會の牧師を辭す。
同　千八百三十三年　歐洲に遊ぶ。
同　千八百三十四年　故山に歸る。
プリマウスのリデアン・ジヤクソンを娶りて第二の家を成す。……コンコルドに移る。
同　千八百三十六年　處女篇「自然論」成る。
同　千八百四十年　「ダイアル」を發行す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com